

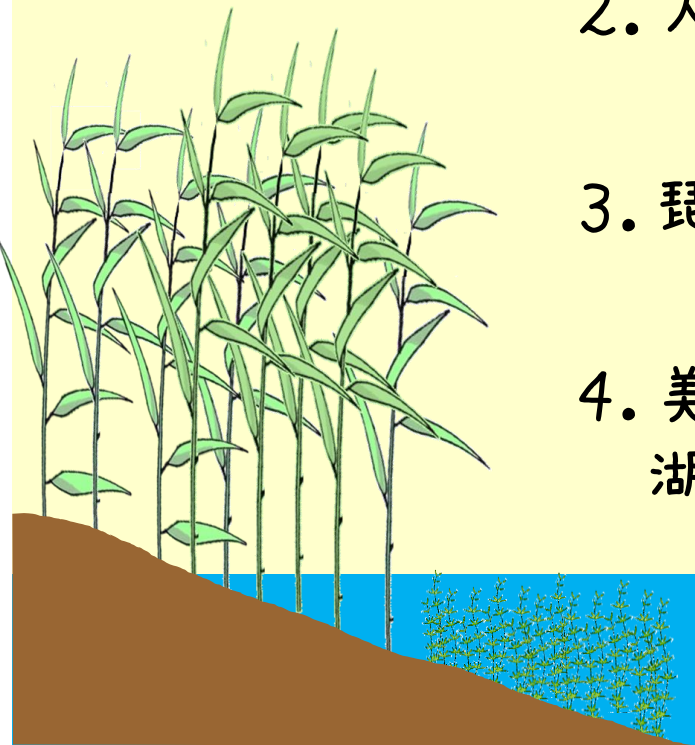
ヨシ原の役割

1. 多くの動植物の生育・生息の場所になる
どうしょくぶつ せいいく せいそく

2. 人の役に立つ資源を供給してくれる
しげん きょうきゅう

3. 琵琶湖の水質を守ってくれる（水質の保全）
すいしつ ほぜん

4. 美しい風景（原風景）
げんふうけい
湖の岸が強い波でけずられるのを防いでくれる



ヨシ原には様々な役割があり、琵琶湖の環境を守る上でも、とても大切な存在です。

役割を1つずつ見ていきましょう。

ヨシについて② ヨシ原の役割

1. 多くの動植物の生育・生息の場所になる

5月～6月頃の梅雨の頃になると、湖の水位が上がってヨシ原が水につかります。

そこに、フナやコイ、ナマズなどたくさんの魚たちが卵を産みにやってきます。琵琶湖の固有種^{ニゴロブナ}のニゴロブナやゲンゴロウブナも、ヨシ原で産卵します。

ニゴロブナ(似五郎鮒)

琵琶湖の固有種。他のフナの仲間に比べて頭が大きく、体高が低い。滋賀県の伝統食「ふなずし」の材料として昔から利用されてきた。



ゲンゴロウブナ(源五郎鮒)

琵琶湖の固有種。名前の由来は、「源五郎」という名前の漁師がこの魚をつかまえて、安土城のお殿様に献上したからという説がある。ニゴロブナは、ゲンゴロウブナに似てるので「似五郎鮒」と名付けられたともいわれる。



ヨシについて② ヨシ原の役割

どうしょくぶつ せいいく せいそく

1. 多くの動植物の生育・生息の場所になる

ニゴロブナの生活史

ヨシ原で生まれ、成長にあわせて住む場所を変えながら、琵琶湖とのつながりの中でいのちをつないでいます。

秋～冬

大きくなって、琵琶湖の深いところに移動する

2～3年かけて25～35cmほどに成長し、産卵のためにヨシ原にやってくる

琵琶湖

ヨシ原

春～夏

生まれた赤ちゃんはヨシ原や水田など水の浅いところで過ごす

水路

水田

春

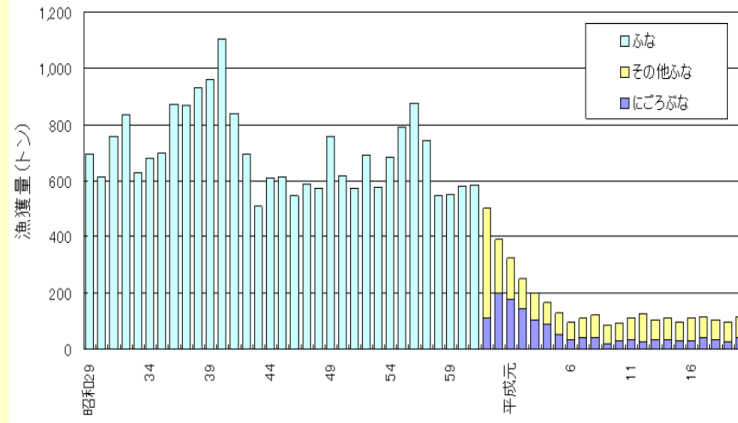
親がやってきて、ヨシ原や水田で卵をうむ

ヨシについて② ヨシ原の役割

1. 多くの動植物の生育・生息の場所になる



ニゴロブナ漁獲量の推移（滋賀県農林水産統計より）



ニゴロブナは

環境省 絶滅危惧IB類

滋賀県 希少種

魚たちはなぜ、ヨシ原で産卵するのでしょうか。それはヨシ原には稚魚を食べる大きな魚たちが入りづらく、おそわれにくいこと。またエサとなるプランクトンなどが豊富なことがあげられます。

ヨシ原は魚たちにとって、安全なすみかと食べ物を与えてくれる「いのちのゆりかご」です。

ニゴロブナはかつて沢山獲れましたが、年々その量が減り、今では絶滅が心配されています。

その原因のひとつに、産卵の場所であるヨシ原が失われたことがあるといわれているのです。

ヨシについて② ヨシ原の役割

どうしょくぶつ せいいく せいそく

1. 多くの動植物の生育・生息の場所になる



オオヨシキリ

フィリピン、マレー半島などから渡ってきて、日本で繁殖。
エサ: 小さな昆虫やクモなど



カイツブリ

ヨシ原などの根元に浮き巣を作る。
エサ: 小魚



カヤネズミ

日本で1番小さなネズミ。
ボール場の巣を作る。
エサ: 草のタネや虫など

ヨシ原には魚以外にもたくさんのいきものたちが暮らし、子育てをしています。

「ヨシ原を守る」ことは、ヨシという植物を守るだけでなく、ヨシ原をめぐる「いのちのつながり」

そのものを守ること。琵琶湖の場合は特に「固有種」を守ることにもつながっています。

いくら北海道にたくさんヨシが生えていても、ニゴロブナのいのちを守ることはできないですね。

ヨシについて② ヨシ原の役割

2. 人の役に立つ資源を供給してくれる

ヨシの利用法

- ・食料(新芽を炒めてタケノコのように食べる) ・薬の原料
 - ・肥料 ・燃料 ・ヨシ紙
 - ・ヨシペン:世界最古の筆記用具(メソポタミア、エジプト文明)
 - ・楽器(ケーナ、ヨシ笛、しちりき)
 - ・ストロー(江戸時代にヨシの若芽を甘露糖につきさして吸う風習があった)
 - ・ヨシちまき(ヨシの葉で包む)
 - ・漁具 エリ漁のすのこ(1年しかもたない→竹と交互に編む ヤナの簀(すのこ))
 - ・生活道具(ヨシズ、屋根)
→ 数十年というサイクルで行われる屋根のふきかえの際、取り除かれた古い屋根は田畑にまかれ、肥料になった
 - ・ヨシ舟 ・占い
- (西川嘉廣「ヨシの文化史～水辺から見た近江の暮らし」より)

ヨシは昔から、世界中の様々な国で使われてきました。

ヨシについて② ヨシ原の役割

2. 人の役に立つ資源を供給してくれる



日本でも昔からヨシは生活に欠かせないものとして、様々な形で使われていました。

中でも、よしやすだれ、屋根を作るためにたくさんのヨシが必要とされ、刈り取りが行われてきました。丈夫で質の良い製品を作るためには、良いヨシが必要です。そのために行われてきたのが、

「ヨシ焼き（火入れ）」です。ヨシ原を燃やすことで土を肥やし、古いヨシや雑草のタネ、病原菌などをなくし、一斉に良いヨシが生えてくるように管理してきたのです。

でもそんなことをしていきものたちは大丈夫なのでしょうか？

ヨシについて② ヨシ原の役割

2. 人の役に立つ資源を供給してくれる

ヨシを焼く目的は

- ・燃やした植物が、新しく生えてくるヨシの肥料になる。
- ・雑草のタネや虫、病原菌なども一緒に焼かれて、きれいなヨシが一斉に生えてくる。



いきものにとっては

- ・ヤナギなどの木が生えづらくなり、ヨシ原が守られる。
- ・ヨシが芽生える前の時期を利用して、ノウルシなどの貴重な植物が生える。



実はこの、人間の「ヨシ刈り」や「火入れ」こそが、多くのいきものを育むヨシ原を守ってきたのです。

ヨシ刈りは、古いヨシなどがたまって土になり、ヤナギなどの木が生えてくるのを防いでくれます。

またヨシ刈りや火入れが行われたヨシ原には、ヨシが芽吹くまでの間、太陽の光が降りそそぎます。

ヨシの葉におおわれるまでの短い時間を使って、ノウルシなどの貴重な植物が生えてきます。人間が人間のために行ってきたことがいきものを守り、増やす役割を果たしてきた。この「共生」のしくみが、「ヨシ原」という場所が持つ大きな特徴です。



春のヨシ原（ノウルシ）

ヨシについて② ヨシ原の役割

3. 琵琶湖の水を守ってくれる(水質の保全)

1. 水の中の栄養(チッソ、リンなど)を使って大きく成長し、ヨシ刈りを通じて湖の外にその栄養を取り出すことができるので、湖の汚れ(=富栄養化)の防止に役立つ

2. ヨシが岸にあることによって水の流れが弱まり(スポンジのような役割)、濁りや汚れのもととなる成分を沈め、琵琶湖に流れ込むのを防いでくれる

3. 水中のヨシの茎につく微生物や、ヨシ原の土の中の微生物によって汚れのもとが分解される

ヨシがあれば水をきれいにしてくれる「スーパー植物」ということでは、決してありません。

しかし上に書いたように、ヨシは様々なはたらきで、琵琶湖の水質をちょうど良い状態に保つのを助けてくれていると考えられています。

ヨシについて② ヨシ原の役割

4. 美しい風景（原風景）

湖の岸が強い波でけずられるのを防いでくれる



季節ごとに変わるヨシ原の風景や、そこにくらすいきものたちの気配は、私たちがいやしてくれます。

またヨシ原は、湖の岸が強い風でけずられるのを防いでくれます。「琵琶湖が今の形でいられるのは、

ヨシが守ってくれてきたおかげ」と話す琵琶湖の漁師さんもいらっしゃるほど、ヨシは人々にとって

身近で大切な存在だったのです。